

大正後期から昭和初期における子どもの 権利保障活動の萌芽に関する研究

—大阪児童愛護聯盟の機関誌『子供の世紀』
(第3巻第2号～第5巻第12号)を手がかりに—

A Study of the Exploratory Activities on the Implementation of Children's
Rights in the Taishō and the Early Shōwa Era

内 田 塔 子*

UCHIDA Toko

要旨

本研究は、大正期から大阪を本拠地として、先進的に児童愛護運動を全国展開した大阪児童愛護聯盟が、大正後期から昭和初期の時代に、どのような問題を子どもの喫緊の課題と認識し、それらの改善のためにどのような視点を重視していたのかについて、聯盟機関誌『子供の世紀』の内容分析を通じて明らかにしたものである。

『子供の世紀』所収の論考をテーマごとに分類・分析した結果、大阪児童愛護聯盟は、義務教育就学率はすでに高率であったものの乳幼児死亡率が依然として高率であった日本において、乳幼児死亡率の低減を最重要課題として育児知識の普及に取り組みつつも、そのみならず、母子保健・医療・教育・福祉・都市計画といった幅広い領域を視野に入れた総合性を備えていること、児童愛護の対象をすべての子どもに設定していることが明らかになった。

キーワード：子どもの権利、児童愛護、大阪児童愛護聯盟、『子供の世紀』、乳幼児死亡率

はじめに

本研究は、大正後期から昭和初期、まだ日本の乳幼児死亡率が高率であった時期に、民間レベルで、子どもを取り巻く問題を改善し、子どもの権利保障の源流となる活動が、どのように展開され、また当時どのような具体的問題が児童問題として取り上げられ、それらの改善のためにどのような視点が重視されていたのかを、資料に基づいて明らかにすることを目的としている。

本研究では、前述の目的を達成するために、研究対象を大阪児童愛護聯盟に設定し、この団体が1923年から1944年まで発行を続けた機関誌『子供の世紀』¹の内容を分析することとした。

* 東洋大学ライフデザイン学部子ども支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design

連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

研究対象をこのように設定した理由としては、大阪児童愛護聯盟が、当時世界第一位の乳幼児死亡率であった大阪を中心に活動を展開し、さらには大阪から全国へその活動を広げる形で日本の児童愛護の活動を先進的に推進した団体であり、民間レベルで地域に根ざした児童問題の解決のために尽力した中心的存在であったと見られるからである。その意味で、本聯盟の活動を分析することが、この時代の民間レベルにおける子どもの権利保障の萌芽の実態を解明していくのに適切と理解できるからである。

また、大阪児童愛護聯盟の機関誌『子供の世紀』に焦点化した理由は、『子供の世紀』が、「児童の福祉増進をはかる」²目的で発行され、児童問題の改善のために有益な情報を一般市民に浸透させていく育児雑誌として大きな役割を果たしていたからである。

研究方法としては、『子供の世紀』を通覧し、①論考内容を分野別に分類し、②論考の中でも特に子どもの実態調査の調査内容および分析視点を読み取ることで、当時注目された児童問題の変遷と、民間団体が子どもの権利保障の萌芽的活動をどのような視点と考えを持って展開していたのかを読み取ることとした。論考で扱われている調査は、聯盟実施の調査や他団体実施の調査のほか、国や諸外国の統計資料が含まれている。ここで実態調査・統計資料を含む論考に限定したのは、『子供の世紀』に掲載されている論考の中から、執筆者の主観的傾向の強いエッセイを除き、子どもの実態を客観的に分析している論考を抽出するためであり、それらの論考に研究対象を絞ることが、当時の社会において、児童問題に取り組む専門家らが何を問題視し、どのような問題意識をもって問題の改善を図ろうとしていたのかを把握することができ、本研究の目的を達成するうえで適切と考えたからである。

なお本稿では、紙幅の都合上『子供の世紀』の初期〔1925（大正14）年2月～1927（昭和2）年12月〕に焦点化し、まだ大正デモクラシーの影響が都市部に残り、その後の経済恐慌に移行する時期のものを見ていく³。

1. 大阪児童愛護聯盟の活動概要

大阪児童愛護聯盟は、大阪市立北市民館の志賀志那人館長らが中心となり、1921（大正10）年10月5日に設立された。このような動きの背景には、1918（大正7）年に米騒動が起り、これを機に大阪市が、全国に先駆けて官民一体の社会事業に着手し、1921（大正10）年6月に志賀志那人を館長に迎えて市長直属の北市民館を設立し、授産事業、衛生事業、母子保護事業等を含めたセツルメント活動を展開していた経緯がある。大阪児童愛護聯盟は、このような活動の中から誕生した組織である⁴。

当時、北市民館が建設された大阪市天神橋筋6丁目周辺は、商店街が立ち並ぶ繁華街として人口が密集し、乳幼児や児童にとって劣悪な環境であった。このため、当時大阪市社会部に奉職していた三田谷啓らの提案で、志賀館長が管内の児童保護に関わる関係者を組織して10月に大阪児童愛護聯盟を設立し、翌月の6日から8日までを「児童愛護デー」として育児の知識や工夫を啓蒙した。また、翌1922（大正11）年9月には、第1回乳幼児審査会（通称「赤ちゃん審査会」）を開催し、1923（大正12）年4月には「乳幼児愛護デー」を実施した。『子供の世紀』は、このような活動の中で、乳幼児及び児童の保護を啓蒙することを目的として創刊されたものである。1923（大正12）年6月の創刊当初は『コドモ愛護』という名称であったが、1924（大正13）年2月に『子供の世紀』に改称され、

1944（昭和19）年の終刊まで刊行された。

2. 論考タイトルの分野別分類結果と調査・統計資料を含む論考内容

1925（大正14）年2月から1927（昭和2）年12月までに発行された『子供の世紀』の論考タイトルを、試みに8つのカテゴリーに分類した結果は、表1の通りであった。

表1

分類カテゴリー	論考本数	うち実態調査取扱論考
①母子保健・医療・児童愛護	159	8
②遊び・児童文化・行事	100	2
③教育	47	2
④非行・教護・児童労働	43	14
⑤保育・子育て・労働	6	6
⑥子育てに関するおとなの読み物	70	0
⑦障害	11	0
⑧児童保護・セツルメント	28	0
計	465	32

465本を数える論考のうち最も多く取り上げられていたカテゴリーは「①母子保健・医療・児童愛護」の159本で全体の30%以上を占める。次いで多いカテゴリーが「②遊び・児童文化・行事」の100本で全体の20%以上であった。以上の2つのカテゴリーの論考が全体の半数以上を占めている。

その他では、子どもに関わる専門家や研究者による子育てに関するエッセイや、子育て日記などを含む「⑥子育てに関するおとなの読み物」が70本（約15%）、「③子どもの教育」に関する専門的知識や情報を伝える論考が47本（約10%）、当時の社会問題となっていた子どもの「④非行・教護・児童労働」などをテーマにすえた論考が43本（約9%）、「⑧児童保護・セツルメント」など社会的養護に関する論考が28本（約6%）、子どもの「⑦障害」に関する論考が11本（約2%）、子育てに対する親の意識などを扱う「⑤保育・子育て・労働」に関する論考が6本（1%）見受けられた。

このように、雑誌『子供の世紀』は、実に多岐にわたる専門領域の論考を掲載していたことがわかる。

以下、次項以降で、実態調査・統計資料を含む論考（表1右欄）について、分類カテゴリーごとに論考タイトルを列挙し、そこで扱われているテーマを概観した上で、聯盟の当時の問題意識、新しい視点や考えを抽出していく。

（1）『子供の世紀』で取り上げる論考の専門分野

465本の論考のうち、調査を取り扱う論考（表1右欄）全32本について、論考タイトルを分類カテゴリー別に列挙すると以下の通りである。

①母子保健・医療・児童愛護

当時の日本の非常に高い乳幼児死亡率を低減させるために、日本と欧米の乳幼児死亡率のデータを比較しながら、日本の現状と課題を考察し、子どもや母親の健康維持に必要な基本的知識や情報を扱う論考が多い。

	論考タイトル・執筆者名・巻-号・発行年	テーマ
1.	「人格の尊厳に着目せよ―児童愛護の根本精神」 伊藤悌二 3-2 大正 14 (1925) 年	乳幼児死亡率と児童愛護について
2.	「小学児童に夥しい蛔虫の寄生」 酒井幹夫 (本聯盟顧問、医学博士) 4-7 大正 15 (1926) 年	小学児童の蛔虫検査の結果について
3.	「児童保護施設」 生江孝之 (日本女子大学校教授) 5-3 昭和 2 (1927) 年	各国出生率および各国乳児死亡率の統計データと比較し、日本のみ出生率・乳児死亡率ともに増加していることについて
4.	「児童保護施設 (二)」 生江孝之 (日本女子大学校教授) 5-4 昭和 2 (1927) 年	母性の健康状態と出生児との関係について
5.	「児童保護施設 (三)」 生江孝之 (日本女子大学校教授) 5-5 昭和 2 (1927) 年	乳児死亡の原因と死亡率について、また欧米の児童健康相談所数について
6.	「児童愛護の根本精神」 伊藤悌二 5-6 昭和 2 (1927) 年	乳児死亡率について
7.	「児童保護施設 (四)」 生江孝之 (日本女子大学校教授) 5-6 昭和 2 (1927) 年	乳児死亡率について
8.	「乳児を生育するために」 藤澤誠之助 (本誌記者) 5-9 昭和 2 (1927) 年	大阪で行われている無料助産事業と乳児死亡率の低下の相関関係について

②遊び・児童文化・行事

『子供の世紀』には、子ども向けの詩・童話・劇シナリオなどの児童文学、童謡が多く掲載されている。特に、『子供の世紀』第4巻第3号 (大正15年3月) は「玩具研究號」、第4巻第4号 (大正15年4月) は「子供の読み物號」といったように、子どもの玩具や読み物についてが特集され、子どもに相応しい玩具、読み物について書かれた論考を掲載している。

	論考タイトル・執筆者名・巻-号・発行年	テーマ
1.	「子供の読む雑誌」 村島歸之 (大阪毎日新聞記者) 4-4 大正 15 (1926) 年	現在東京で刊行されている雑誌のタイトルとその内容について

2.	「こどもの命名とこどもの読物に就いて諸家のご回答」 執筆者名なし 5-6 昭和2（1927）年	子どもの命名由来、子どものために有益と認める雑誌・書籍について
----	--	---------------------------------

③教育

子どもの教育環境や発達に関して分析する論考が掲載されている。

	論考タイトル・執筆者名・巻-号・発行年	テーマ
1.	小学生の学用品携帯に就いて 酒井幹夫（医学博士） 5-4 昭和2（1927）年	小学生が携帯する学用品の重量と持ち方について、また持ち方別の苦痛の有無について
2.	「秀才と愚才の教育心理学的考察（三）」 堀内龍子（野村教育研究所） 5-7 昭和2（1927）年	人種、社会的階級、男女の性別、及び身体的条件や過去の生活等が児童の知能に与える影響について

④非行・教護・児童労働

当時社会問題化していた、いわゆる不良少年の非行実態を紹介して原因を考察する論考や、児童労働の実態について考察した論考が掲載されている。

	論考タイトル・執筆者名・巻-号・発行年	テーマ
1.	「労働市場の子ども」 水野和一（大阪職業補導会主事） 3-11 大正14（1925）年	失業者家族における就業児童の実態について
2.	「蝕れ行く少年の群（三）不良少年と性欲」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-3 大正15（1926）年	不良少年が性的に早熟であることとその原因について
3.	「可哀さうな子供の内職 - 六時間働いて収入が五銭一萬年小学校の児童内職調べ -」 4-4 なし 大正15（1926）年	細民の児童ばかりが通う下谷萬年小学校児童の内職実態について
4.	「蝕れ行く少年の群（四）不良少年と読物」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-4 大正15（1926）年	不良少年がよく読む書物とその内容について
5.	「蝕れ行く少年の群（五）不良少年と娯楽」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-5 大正15（1926）年	不良少年が好む娯楽について、また調査対象の感化院在館生が入館前と入館後で、好む娯楽が大きく変化することについて
6.	「蝕れ行く少年の群（六）性道楽と酒煙草」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-6 大正15（1926）年	受刑少年の娯楽の実態、犯罪及び感化少年の性的道楽・飲酒・煙草に関する実態、受刑少年の飲酒に至った契機について
7.	「蝕れ行く少年の群（七）活動写真の感化」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-7 大正15（1926）年	不良少年にみる活動写真と不良行為の相関関係について

8.	「蝕れ行く少年の群（八） 教育と不良児」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-8 大正 15（1926）年	犯罪少年、監獄入監少年、不良児、不良学生の就学状況、教育程度、成績と操行について
9.	「蝕れ行く少年の群（九） 不良学生」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-9 大正 15（1926）年	不良学生の学校種別（中学生、小学生、専門学校生別）人数について
10.	「蝕れ行く少年の群（十） 感化の径路」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 4-11 大正 15（1926）年	不良児が悪化した原因について
11.	「蝕れ行く少年の群（十三）」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 5-2 昭和 2（1927）年	不良少年の不良行為の直接的原因について
12.	「蝕れ行く少年の群（十四） 浪費癖」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 5-3 昭和 2（1927）年	不良少年の浪費癖について、浪費の具体的行為内容、一日の小遣金の金額、買い食いの金銭の出所について
13.	「幼年者の自殺について」 中村古峽 5-10 昭和 2（1927）年	16歳未満の幼年者の自殺数とその原因について
14.	「蝕れ行く少年の群（十六）」 村島歸之（大阪毎日新聞記者） 5-12 昭和 2（1927）年	不良児の身体的素質に欠陥を有する数が多いことについて

⑤保育・子育て・労働

子どもの保育の実態、親の子育てに対する意識について扱う論考が多く掲載されている。

	論考タイトル・執筆者名・巻-号・発行年	テーマ
1.	「第三回大阪赤ん坊審査会尋問答案調査表」 余田忠吾（大阪市立産院長、医学博士） 3-11 大正 14（1925）年	母親の子育てに関する意識調査の結果について
2.	「文字に現はれたる婦人の覚悟（三）第三回赤ん坊審査会に於ける調査」 余田忠吾（医学博士） 4-10 大正 15（1926）年	母親の意識に関する調査結果について（23歳と24歳の母親について）
3.	「第四回赤ん坊審査会に於ける調査 赤ん坊の命名其他」 余田忠吾（医学博士） 4-11 大正 15（1926）年	子どもの命名由来、出産にかかる費用や行事の実態に関する母親調査の結果について
4.	「文字に現はれたる婦人の覚悟（四）第三回赤ん坊審査会に於ける調査」 余田忠吾（医学博士） 4-11 大正 15（1926）年	母親の意識に関する調査結果について（24歳と25歳の母親について）
5.	「保育所から見た幼児の生活」 金岡のぶみち（弘済会保育部） 5-3 昭和 2（1927）年	保育所に通う幼児の養育者とその職業について、また幼児の将来の夢について
6.	「児童保護施設（六）」 生江孝之（日本女子大学校教授） 5-9 昭和 2（1927）年	フランス、イギリス、アメリカにおける保育所の設置状況について、日本の保育事業の歴史的経緯と近況について

当時の日本の喫緊の課題であった乳幼児死亡率の低減のために、保健衛生面や小児医療に関する必要な情報や注意喚起をする論考が多く取り上げられているなかで、『子供の世紀』ではそのみならず、子どもの遊び、教育、保育、特に非行傾向のある子どもについてや、子育てする親自身に焦点をあてた論考も多く掲載している。以上から『子供の世紀』は、子どもの育ちに関わる多様な領域を視野に入れて編集されていたことがわかる。

次項では、『子供の世紀』が広く世に問わんとした当時としては先進的な知見について、それらが読み取れる論考を参照しながら見ていくこととする。

(2) 論考にみる新たな知見

①育児知識の普及とそのための児童愛護運動の必要性について

第一に、子育て家庭に対して、子育てに関する知識・情報を周知させることの重要性和、子どもに十分に愛情を注いで大切に育てる意識を親たちに高めるための児童愛護運動の必要性についての指摘が読み取れる。

乳幼児死亡率と児童愛護について扱う論考「人格の尊厳に着目せよ一児童愛護の根本精神」⁵では、日本を含む各国の乳幼児死亡率に関するデータが紹介されたうえで、「乳幼児死亡率を下げるためには、①母乳育児の奨励、②子供に適した食物と保護を与えること、に加えて、③若い母親に保育に関する知識を与えることが重要である」と主張されている。

別の論考「児童保護施設(三)」⁶では、親の育児知識の乏しさについて、「乳児死亡の原因として、生まれつき虚弱の子どもが病気に冒され易い事実は当然あるにしても、それよりむしろ無知であるがゆえの健康児に対する不適切な取扱に起因するものが多いことは、家庭と社会の恥辱であり、このことは乳児に対する虐待もしくは一種の反逆行為である」と子育てに関する無知が痛烈に批判されている。また、無知による不適切な子育て事例として、論考「乳児を生育するために」⁷において、「親の衛生観念の欠如から乳児を死亡させた例、精神障害のある母から生れて死亡した乳児の例、乳母も子守もなく上の子が乳児を人形のように扱って怪我をさせた例」が紹介されている。

さらに、母親の子育てに関する意識調査の結果について紹介している論考「第三回大阪赤ん坊審査会尋問答案調査表」⁸「文字に現はれたる婦人の覚悟(三)」⁹「文字に現はれたる婦人の覚悟(四)」¹⁰では、大阪で開かれた赤ん坊審査会に参加した母親に対して、「あなたが仮に次の様な三人の子供をもつとして、①五歳の達者な賢い男児 ②三歳の弱い盲目の女児 ③生後一ヶ月の達者な男児 の三人のうち、一人だけ助けることが出来るとせばどれを助けますか」というアンケート調査が実施され、①という回答が5割以上、②という回答が約3割、③という回答が約1割という回答結果であったことが示され、③の回答が低いことについて、「達者な男児でも生後一ヶ月くらいでは母親の目には絶対的な信頼を勝ち得るほどではない」¹¹と論評され、乳児段階では、まだその子どもが立派に成長するか否か、親自身が確信をもっていない実態が明らかにされている。

このように、『子供の世紀』は、まず育児を取り巻く当時の現状認識として、第一に、子育て中の親の育児に関する基本的知識が乏しく、ずさんな子育てをしている例が散見され、知識さえあれば子どもの罹患や死亡を避けられる場合が多いということ、第二に、乳児死亡率が高いことが、とりわけ乳児に対する親の子育て意識に影響を及ぼしている実態があることをこれらの論考によって示してい

る。そして、このような現実を改善するためには、第一に、育児知識を一般家庭に普及させることが重要であること、第二に、知識を普及させるためには、育児知識を身につけ、それに基づいた子育てをすることが望ましいことを一般家庭に認識させる必要があり、そのためには「世論を喚起すべく児童愛護運動に着手しなければならない」¹²と述べ、一般家庭の関心を高めるための有効な手段として児童愛護運動の推進が重要であることが指摘されている。

②相談制度の必要性について

第二に、『子供の世紀』所収の論考では、乳幼児死亡率の低減を実現するために、前項にあげた点に付け加えて、相談制度の必要性についても度々主張されている。

前出の論考「児童保護施設（三）」¹³では、欧米の児童健康相談所数を取り上げ、このような社会的施設が乳幼児死亡率の低下を実現した実力ある施設である、と紹介している。続けて「児童保護施設（四）」¹⁴では、ニュージーランドにおける健康相談所の取り組みが、2歳以下の乳児の胃腸病による死亡率に及ぼした効果について、欧米諸国の乳幼児死亡率との比較分析から考察し、この実践例が世界の児童保護事業界にとってよい刺激であり鞭撻であり模範である、と述べられている。

また、前出の論考「乳児を生育するために」¹⁵では、大阪毎日慈善団が大正3年から無料助産事業を展開し、産婆を頼む経済力がない産婦のために無料で嘱託助産婦を派遣し無料で助産させるだけでなく、産後の育児法の相談をうけるために家庭訪問委員を巡回させて指導の任に当たらせており、それが1歳未満児死亡率（大正13,14年）の低下に貢献している実態について紹介し、それを高く評価している。

このように『子供の世紀』では、欧米の事例、大阪の先進事例を紹介する論考が掲載され、乳幼児死亡率の低減のためには子育てについて相談できる社会制度づくりが必要であることが指摘されている。

③子ども向け読み物の内容を充実させる必要性について

第三に、『子供の世紀』では、子どもの読み物をテーマにした論考が度々掲載されている。当時義務教育が普及し、子どもの読書欲が高まっていくに伴い、子ども向けの読み物が多く発行されるようになった社会状況をうけて、子どもがどのような読み物を実際に手に取り、それが子どもの成長にどのような影響を及ぼしているのかを具体的に示しながら、読み物が子どもの成長に大きく影響を与えることを『子供の世紀』は度々示唆している。

論考「子供の読む雑誌」¹⁶では、現在東京で刊行されている雑誌名が対象年齢別に挙げられ、子どもにふさわしい内容か否かが論評されている。

具体的には、東京で発行される子ども向け定期刊行物の雑誌名と価格について、〔学齢前児童向け〕〔小学校下級生徒向け〕〔小学校上級から中等初学年の生徒向け〕に分けて列挙し、内容について、「子どもに対する視覚の刺激が強烈過ぎることはないか」「子どもの年齢別学力に応じた文字や内容を含めているか」「詩を取り上げることが望ましい」といった点について分析、指摘している。例えば、〔小学校上級から中等初学年の生徒向け〕雑誌においては、『少女倶楽部』を取り上げ、その内容構成が、必ずしも歴史教科書の記述と一致しない歴史小説と概ね余りにセンチメンタルに過ぎる少女小説が雑

誌全体の半数を占めていること、科学的記述が少ないことを批判している。

さらに、神戸市葺合教育会児童愛護研究会が行った「既往三ヶ月間に読んだ雑誌」調査の結果を紹介し、購読者数をランキング化すると、多くの児童が読んでいる雑誌は歴史小説物であること、奈良高等師範学校から発行されている子どもにとって理想的といわれる雑誌はあまり読まれていないことを指摘している。また、大人向け雑誌も子どもに読まれていることから、雑誌を選択することを知らない子どもが手当たり次第濫読しても悪影響がないように、父兄は常に雑誌の内容に注意して健全な雑誌を選択して与えるべきであり、父兄自らも良書を選んで座右に備えておくことが重要であると指摘している。

また、論考「蝕れ行く少年の群（四）不良少年と読物」¹⁷においても、神戸市葺合教育会児童愛護研究会の調査結果を引用し、犯罪的素質のある不良児は盗賊が姿を見せたかと思うとたちどころに姿を消すような出没自在の忍術使いに憧れ、忍術使いを実際に模倣するといった困った事例を紹介したうえで、「最も多く読まれている書物であった『豆本』（掌大の小冊子）の内容は、学校の教師が推奨しあるいは黙許するものは小数で、多くは荒唐無稽な忍術本、盗賊伝、冒険小説または浅薄な恋愛小説の類が多く、それらが子どもに悪影響を及ぼす」と批判し、子を愛する親は悪書追放運動を積極的に推進する必要があると呼びかけている。

このように『子供の世紀』は、子どもの読書欲は善良児・不良児にかかわらず同様に存在し、子どもは自分の知識程度で吸収できる限りのことを吸収しようとする特質があること、また大人はその特質を踏まえて子どもに適切な読み物を与え、悪書を排することの重要性を伝えている。

④子どもの実態への理解と子どもに対する特別な配慮の必要性について

第四に、『子供の世紀』では、子どもの実態を調査結果に基づいて紹介し、子ども理解や子どもへの配慮を求める論考も掲載されている。

例えば、「小学生の学用品携帯に就いて」¹⁸では、文部省が、東京府及び他12縣の各都市における2校ずつの小学校と中学校及び女学校に対して、児童生徒の携帯品の平均重量について調査した結果を紹介し、「携帯品重量について、尋常3年までは男児よりも女児が軽い、4年生以上は女子が重くなっている。地方と東京とを比べると東京の児童は地方の児童よりも参考書や雑誌類を余計に持つので、携帯品は重い。」という実態を伝えている。さらに、大阪市立愛日尋常高等小学校における携帯品の包装の種類および携帯方法についての調査結果も紹介し、「携帯品の包装の種類で一番多いのが雑囊、次いで手提げカバン、背囊、という順序で、この3種類が大部分を占めている」こと、さらに学用品携帯による苦痛の有無について、「苦痛を感じるものが18%、感じないものが82%で、全生徒の約5分の1までは携帯品のために苦痛を訴えており、一番苦痛の訴えが多い持ち方は、手提げと風呂敷包み、又は雑囊と風呂敷包みの二種類を持った場合であった」ことを伝えている。

この論考では、街なかで重い携帯品を運搬する子どもたちの姿に焦点を当て、学校の習字や読書時等に再三児童の姿勢について指導していながら、通学途中における携帯品の運搬姿勢については注意が払われていないことを指摘し、重い携帯品を運搬することが子どもに疲労感を与え、不良な姿勢のために脊柱が曲がり、胸部や腹部の内臓に悪影響を及ぼす可能性があるとして警鐘を鳴らし、「第一に児童の携帯品はできる限りその重量の軽減をはかること、第二に携帯品の包装はなるべく背囊を利用す

ること、通学道程の長い子供、及び弱質児童並びに下級生については特に配慮すること、手提げカバンや風呂敷包みのようなものは左右持ち替えること」などの対策をとり、子どもの姿勢を保つことの重要性について注意喚起している。

そのほか、別の論考「保育所から見た幼児の生活」¹⁹では、弘済会保育部に通う幼児の将来の夢について、「男子の場合①軍人31%②職人17%③商人12%④靴屋12%⑤下駄屋12%、女子の場合①姉さん20%②先生保母18%③裁縫ミシン18%④女中奉公9%⑤芸者8%という結果であった」ことが紹介され、両親の職業を真似ている子供、環境に左右されている子供、全くの自己開拓の子供、ある衝動を受けた子供、漫然とした空想的な子供などに大別できるとし、学齢期前の幼児がこのような現実的な将来の夢を描いていることを伝えている。

このように、『子供の世紀』は、おとなが見過ごしがちな子ども一人ひとりの姿に焦点を当て、子どもたちの実態への理解と子どもに対する特別な配慮の必要性も伝えている。

⑤子どもを取り巻く環境整備の必要性について

第五に、『子供の世紀』では、非行傾向のある子どもについても取り上げ、そのような子どもたちの実態を分析することで、子どもを取り巻く環境が子どもの成長発達にいかに関与しているか、それゆえに環境整備が重要かを伝えている。

まず非行傾向のある子どもの実態として、「蝕れ行く少年の群（三）不良少年と性欲」²⁰では、40の感化院、8つの監獄に収容されている子供について調べた原房孝氏の調査を引用し、これらに収容されている子供の性体験年齢が低い（男子：全体の6割が15歳～18歳、女子：全体の7割が15歳～18歳）こと、性体験の相手が娼妓や淫売婦の場合、きっかけが友人による勧誘が最も多いこと、性産業に出入りするには多額の金が必要になるため、盗みなどの犯罪行為に容易につながっていくこと、が指摘されている。

また子どもが、夜遊びをする、活動写真に耽る、保護者の目を掠めて抜け遊びをする、といった不良行為をする直接的原因として、葺合児童愛護研究会が大正12年3月に不良少年201名を対象に実施した調査の結果を引用し、「遊びにふけるため」「面白味を感じるため」「誘惑されたから」「住居狭隘のため」「家庭不取締のため」「淋しさを感じたため」「活動写真の影響」「叱責されたから」「家庭生活が不快であるから」等の原因を紹介している²¹。

このような子どもの実態を分析し、いかにこれらの子どもたちを取り巻く劣悪な環境が、彼らの成長発達に悪影響を及ぼしているかを指摘し、次の4つの柱を中心とした環境整備の必要性を主張している。それはすなわち、①公娼制度の廃止といった社会環境の整備を推進すること²² ②貧民窟のような家屋の狭隘さが子どもに年長者の性生活をさらし、それが子どもを性に関して早熟にさせる原因となるため、家屋の改良を推進し、住環境を整備すること²³ ③「家庭不取締のため」「家庭生活が不快であるから」などを不良行為の直接的原因としてあげる子どもが減少するように家庭環境を改善すること²⁴ ④子どもにとって十分遊べる広場を確保するなど、遊びの環境を整備すること²⁵ である。

『子供の世紀』では、非行傾向のある子どもの不良行為の直接的原因や背景を見ることで、劣悪な環境が子どもの不良化を招くのであり、それを阻止するためには、社会環境、住環境、家庭環境、遊びの環境といった子どもを取り巻く環境を整備することが重要であることが指摘されている。

『子供の世紀』掲載論考が示している前述の5つの知見は、当時の子どもと子育てを取り巻く社会状況に鑑みて大変先進的なものである。以上から、『子供の世紀』編集人の伊藤悌二および大阪児童愛護聯盟は、『子供の世紀』の発行と頒布によって、このような新たな知見を広く一般に普及させようと努力していたことが推測できる。

3. 考察

以上、大阪児童愛護聯盟機関誌『子供の世紀』のうち、大正末期から昭和初期に刊行されたものを通覧し、テーマごとに論考を分類・分析した結果、明らかになったのは以下の三点であった。

第一に、当時先進的に児童愛護運動を展開していた「大阪児童愛護聯盟」が、子どもに関する最重要課題と認識していたのは言うまでもなく、日本の非常に高率の乳幼児死亡率であったことである。それはこの問題に関係する論考が『子供の世紀』に最も多く掲載されていたことから推察される。医学博士、大学教授、社会事業家など幅広い分野の専門家が、欧米の先進事例、統計資料、調査結果等を参照しながら、乳幼児死亡率を低減させるために、育児知識の普及や欧米の児童健康相談所のような相談制度を設置する必要性を主張し、本誌を通して具体的な育児知識・母子の健康維持に必須の情報を読者に伝えた。

第二に、「大阪児童愛護聯盟」の活動が日本における子どもの権利保障活動の萌芽と理解できる点として、本聯盟の推進する児童愛護運動が、母子保健・医療・教育・保育・福祉・都市計画といった幅広い領域を視野に入れた総合性を備えているとみられることである。それは『子供の世紀』が、乳幼児死亡率低減のための育児知識の普及と相談制度の整備²⁶のみに限定されることなく、子どもの読み物の質向上への提言、子どもに対する特別な配慮や理解を一般家庭の大人に求める論考や、子どもを取り巻く社会環境・住環境・家庭環境・遊びの環境整備を求める論考を掲載し、読者に情報提供していたことに表れている。実際、「大阪児童愛護聯盟」主事で『子供の世紀』編集人である伊藤悌二は、『子供の世紀』掲載論考の中で、児童愛護の重要課題を「①性的方面—出生、発育、乳児の疾病、子供の死亡率等の問題 ②心理的方面—教育、趣味（童謡、劇、児童音楽）動物心理学より来る諸種の研究、遊戯、児童遊園地等の問題 ③精神的方面—道徳上の問題、不良少年の問題、環境感化及び密集部落、街上の諸問題」²⁷とまとめている。このように「大阪児童愛護聯盟」の活動は、子どもの安心で健康的な成長を保障するには、保健衛生面だけでも教育面だけでもない、子どもの生活全般をあらゆる角度から考慮する総合的視野をもっていたということが指摘できる。この総合性が、子どもの権利実現のために求められるホリスティックな視点につながるという点で、聯盟の活動は子どもの権利保障活動の萌芽と見ることができる。

第三に、「大阪児童愛護聯盟」が児童愛護の対象を、善良児・不良児を問わずすべての子どもに設定していることである。「子供は生れ乍らにして愛護さる可きもの」²⁸との認識に立ち、病弱児、私生児、職業婦人の子ども、孤児、障害児、里子、捨子といった特別なニーズのある子どもに限らず、すべての子どもを対象として、児童愛護のための世論喚起が意図されている。

義務教育就学率はすでに高率を達成していたものの、乳幼児死亡率が依然として高率であった日本において、乳幼児死亡率の低減が社会の一大関心事であった時代に、それ一辺倒になることなく、欧

米の先進事例に学び、子どもと子育て家庭の実態を統計資料や調査結果で客観的に把握しながら、すべての子どもの生活全体を見据えた総合的な視点を有していたという点で、「大阪児童愛護聯盟」は、子どもの権利保障活動のさきがけといえる民間団体であったと考えられる。

おわりに

本研究では「大阪児童愛護聯盟」が、大正末期から昭和初期にかけて、すでに母子保健、医療、教育、保育、児童福祉、都市計画といった幅広い専門領域を視野に入れて、『子供の世紀』を月刊誌として発行し続けていた実態を明らかにした。この時代にすでにこのような学際的な視点を持って活動が展開されていたことは特筆に値する。しかしこれは別の見方をすれば、子どもと子育て家庭を支えようとした当時の活動家らが、子どもと子育て家庭の現実から出発して児童愛護を推進しようとしたとき、例えば母子保健領域からのアプローチのみでも、教育領域からのアプローチのみでも、現実子どもが直面する多くの問題を解決することはできず、必然的に総合的な視点の重要性を「実践認識」として持つに至ったと解釈することも可能である。

本研究の今後の課題として、今回明らかになった特徴が、経済恐慌以後、満州事変、日中戦争、第二次世界大戦と戦時色が濃くなる時代へと変遷していくなかで、どのように変容していくのか、引き続き『子供の世紀』の通覧・分類作業を進めて検証したい。

(本稿は平成22年東洋大学海外特別研究による研究成果の一部である。)

注釈

- 1 『子供の世紀』には、その前身として『コドモ愛護』(1923(大正12)年5月創刊)があると記述されているが、現在所蔵は確認できない。
- 2 伊藤悌二『『愛護叢書』発行に就て』『子供の世紀』第3巻第2号、47頁)
- 3 研究対象とした『子供の世紀』は、第3巻第2号・第11号(それ以外の号は所蔵不明)、第4巻第3号～第12号(1・2号は所蔵不明)、第5巻第1号～第12号の計24冊である。『子供の世紀』の前身の『コドモ愛護』(『子供の世紀』第1巻に位置づけられているようである)、『子供の世紀』第2巻第1号～第12号ともに所蔵が確認できていない。
- 4 和田典子「大阪児童愛護聯盟の機関誌『子供の世紀』について—創刊・終刊を中心とした書誌事情とその位相—」『近畿福祉大学紀要』第7巻第2号、平成18(2006)年
- 5 伊藤悌二『子供の世紀』第3巻第2号、大正14(1925)年
- 6 生江孝之『子供の世紀』第5巻第5号、昭和2(1927)年
- 7 藤澤誠之助『子供の世紀』第5巻第9号、昭和2(1927)年
- 8 余田忠吾『子供の世紀』第3巻第11号、大正14(1925)年
- 9 余田忠吾『子供の世紀』第4巻第10号、大正15(1926)年
- 10 余田忠吾『子供の世紀』第4巻第11号、大正15(1926)年
- 11 注8に同じ。
- 12 注5に同じ。
- 13 注6に同じ。
- 14 生江孝之『子供の世紀』第5巻第6号、昭和2(1927)年

- 15 注7に同じ。
- 16 村島歸之『子供の世紀』第4巻第4号、大正15（1926）年
- 17 同上
- 18 酒井幹夫『子供の世紀』第5巻第4号、昭和2（1927）年
- 19 金岡のぶみち『子供の世紀』第5巻第3号、昭和2（1927）年
- 20 村島歸之『子供の世紀』第4巻第3号、大正15（1926）年
- 21 村島歸之「蝕れ行く少年の群（十三）」『子供の世紀』第5巻第2号、昭和2（1927）年
- 22 同上
- 23 同上
- 24 同上
- 25 村島歸之「蝕れ行く少年の群（五）不良少年と娯楽」『子供の世紀』第4巻第5号、大正15（1926）年
この点を実証する例として、大阪府立修徳館（感化院）在館生を対象とした調査で、不良少年の好む娯楽は、感化院入管前はおおよそ6割が活動写真を挙げているが、感化院に入館したのち館内で団体生活を行うようになり、周囲に遊ぶのに適当な広場があると、活動写真を上げる割合が激変し、保母の話や戸外遊戯が挙がってくるという事例を紹介している。
- 26 育児知識の普及と育児に関する相談活動を推進するために、大阪児童愛護聯盟は「赤ちゃん審査会」を年に1度開催している。
- 27 伊藤悌二「人格の尊厳に着目せよー児童愛護の根本精神ー」『子供の世紀』第3巻第2号、6ページ
- 28 伊藤悌二「人格の尊厳に着目せよー児童愛護の根本精神ー」『子供の世紀』第3巻第2号、5ページ

（参考文献）

- 喜多明人 「“実践的子どもの権利学”への道ー子どもの権利規範の歴史的な形成過程をたどるー」『子どもの権利研究』創刊号、日本評論社、2002年
- 古川孝順 『子どもの権利』有斐閣、1982年
- 堀田 穰 『『子供の世紀』と児童愛護聯盟』『志賀志那人 思想と実践』和泉書院、2006年
- 和田典子 「大阪児童愛護聯盟」の機関誌『子供の世紀』についてー創刊・終刊を中心とした書誌事情とその位相ー』『近畿福祉大学紀要』第7巻第2号、2008年

A Study of the Exploratory Activities on the Implementation of Children's Rights in the Taishō and the Early Shōwa Era

UCHIDA Toko

Abstract

The purpose of this study was to clarify what the Association of Osaka Child Protection thought as the urgent children's problems and what they thought was important to improve the children's situation in the Taishō and the Early Shōwa Era, by classifying the articles published in "*The Century of the Child*" which was the Journal of this association.

It became apparent that, they considered their goal was to reduce the very high child mortality rate of Japan, and therefore, they tried to extend the knowledge of the child care to the parents. In addition, it also cleared that they covered many fields of study, such as maternal and child health, medical care, education, social welfare and city planning, and they focused on all children regardless of their physical, social or other conditions.

Keywords: children's rights/child protection/ The Association of Osaka Child Protection/"*The Century of the Child*"/ Child Mortality Rate